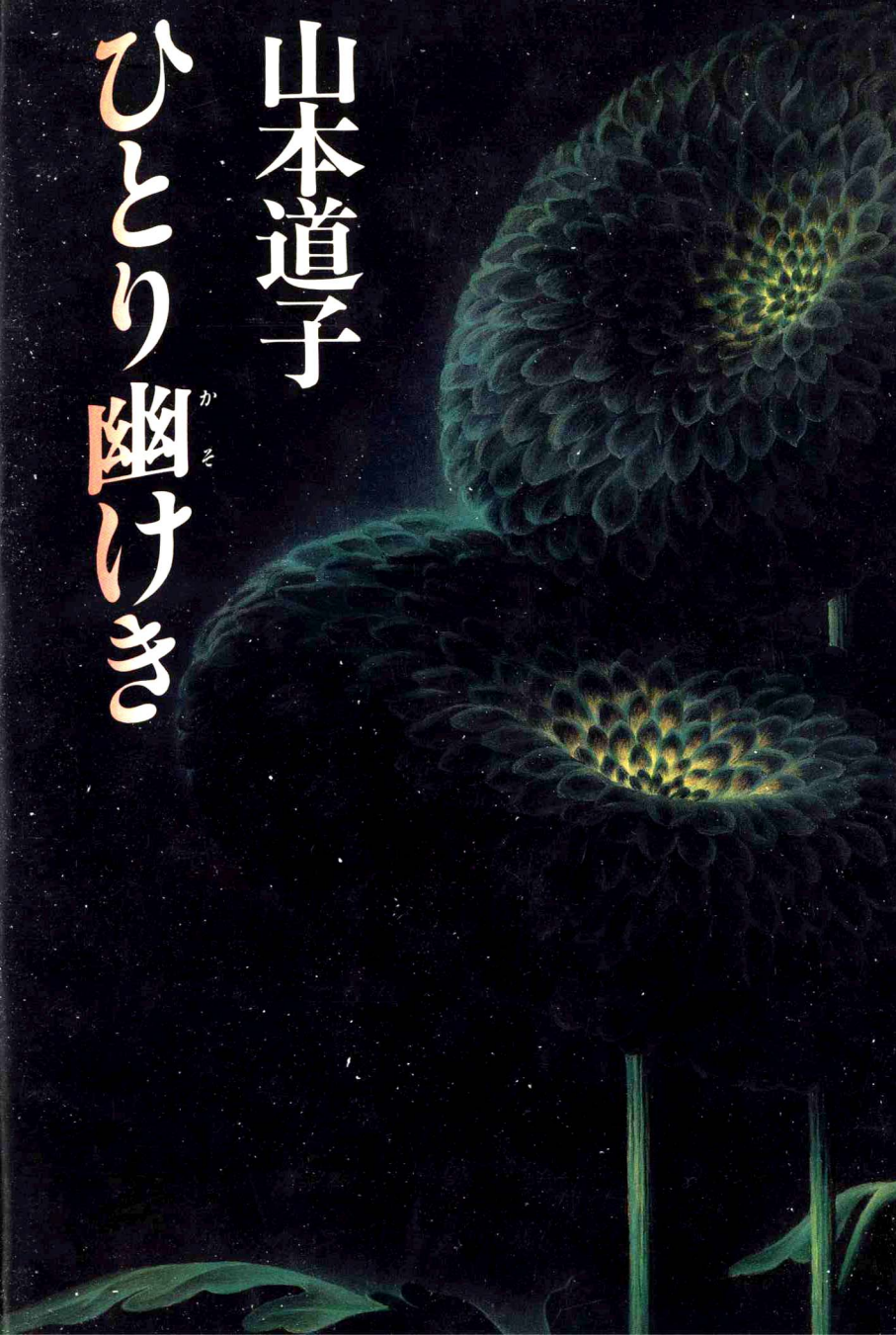
ひとり幽(かそ)けき

山本道子



とり幽(かそ)けき

本道子

文藝春秋

ひとり幽(かそ)けき

昭和六十二年四月十五日　第一刷
昭和六十二年六月　五日　第二刷

定価　九五〇円

著者　山本道子
発行者　西永達夫
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表(〇三)二六五―一二一一

印刷所　大日本印刷
製本所　中島製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

©Michiko Yamamoto 1987　Printed in Japan　ISBN4-16-309560-8

ひとり幽（かそ）けき

装画　奥山民枝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

――暗いなあ、どうしてこんなに暗いんだ、なんとかしてくれ。

蒼野克二は、呻くような声に彼方を振り返った。室内には能梨子が生けたばかりの、薔薇のかおりが微かにただよっていた。克二は、鼻孔をひらくようにしてそのかおりを吸いこんだ。すると不思議なくらい静かな室内の空気に気づいた。――暗いなあ……という呻き声は、いつのまにか耳の底から体内に消え去ったように、彼の肉体にじんわりとした温もりと一緒に、液体が流れこんでいくような感覚だけをのこした。

克二は、右腕を伸ばして、眼の上に指を挿頭(かざ)した。五本の指は枯れきった小枝のように、力なくばらりと広がって、すぐに胸に落ちた。彼は下眼づかいでその指を眺めた。シーツにつつまれた毛布が、いま自分自身のからだにこうしてすっぽり巻きついているのだという思いが、彼をい

つもの絶望感に突き落した。

この部屋に、薔薇の匂いがただようなどありえないことだ、と克二はしんと冴えかえった頭のなかで呟いた。能梨子が、花束を胸に抱えてドアを開けたのは、もう随分むかしのことだ。あれはもう過ぎ去ったことどもの、ほんの一場面にすぎない。そうだ、能梨子は赤ん坊のようにぽっちゃりした手で、胸いっぱいの花の束をしっかり抱きかかえていた。あれの笑顔は、たったいま、庭の垣根越しにあまり上品とはいえない噂ばなしを聞かされて、その可笑しさと驚きに、生きいきと甦った能梨子の笑顔だった。ねえ、あなた、面白いこと聞かされたわ、吉住さんのおじいちゃんとおばあちゃん離婚が成立したんですって、こんな変なことってあるかしら、だっておじいちゃんは八十一歳でおばあちゃんは七十八なのよ、吉住さんの奥さんからたったいま聞かされたのよ、離婚をのぞんだのはおばあちゃんの方なのよ、それがねえ、可笑しいの、あのおばあちゃんは毎晩、とても生なましい夢を見るんですって、もう一年近くその夢に悩まされていて、このままでは寿命を全うする前に命があぶないと思ったっていうの、ねえ、あなた、どういう夢だと思う、それが可笑しいのよ、相手はいつもおじいちゃんだから問題ないのだけど、毎晩性交して受胎して妊娠して出産する夢を、実に実にこと細かに見るっていうの、その生なましさがとても現実とは比較にならないぐらい凄くて、性交しても出産しても、体液だの血液だのがどろどろ出て来るっていうの。おばあちゃんは、もう一年近く、毎晩赤ん坊を一人ずつ産みつづけて、昼間も育児の妄想にとりつかれかねないっていうのよ。三百人近い赤ん坊にとりまかれて、息苦しく

てこれ以上夫婦生活は続けられないっていうの……。

吉住老夫婦の離婚ばなしを喋りながら、能梨子は絶えず笑い転げていた。彼女には老婆の見る奇怪な夢が途方なく愉快なサイエンス・フィクションじみたものに思えたのだ。きっとそうだ。そうにちがいない、と克二は思う。能梨子のしんから可笑しそうな話し振りを見ながら、克二はその話の内容がどれほど奇怪なものであるか、彼自身、うっかり素通りしてしまいそうな気分にさえなった。

あのときの能梨子は、しかしなんと可憐な女だったことか。——ねえ、あなた、吉住さんのおばあちゃんは、ほんとうはどうなのかしら、その変な夢から逃げ出したいのか、それともおじいちゃんから逃げ出したいのか、どっちが本心なのかしらねえ。

たぶん両方だろう、と克二はいった。いいながら、毎夜、老いた妻を孕ませる老人の生命力について考えた。現実にはありえない茶番であっても、老いた妻の内部で、彼は確実に女の性にかかわっていたのだ。

——暗いなあ、どうしてこんなに暗いんだ、なんとかしてくれ。

克二は、十年前にもなる父の臨終の席に、実際に立ちあっていたのかどうか、はっきりしない。記憶が定かでないというより、もう一年近くもベッドに横たわっている身としては、父親の臨終が、いまだに解決されていない進行形の出来事のような気がするのである。頭の隅で十年もむかしのことであったと囁く声がする。しかし、十年という歳月は、いまこの室内ではどうしても、

理解できない、という思いが先に立つ。そして――暗いなあ、と密かに呟く老いたおとこの声が、耳もとでその生臭い息を吹きかけるように繰り返されるのが、克二には途方もなく恐ろしい。彼は、枕から頭を起して、室内を見まわす。入口の方に首を巡らして見る。――暗い、暗い、ここはどこだ、どうしてこんなに暗いんだ。亡父の声が壁から滲み出る液体のように、彼の肌をじっとりさせる。そうだ、この部屋は肉体だ、彼は突如能梨子の肌を思う。全身の毛穴から光る汗が滲み出て、この壁のように、ずっしりと重くのしかかっていた。いまも能梨子が汗をかきながら、自分の裸体を忌いましげに眺めまわしている。

――ねえ、あなた、人間ってほんとにイヤな生きものね、鱗のない魚みたいに、つるんつるんで、熱くなったり冷たくなったり。

能梨子は、両脚を投げ出して、ヘッドボードに寄りかかる恰好で、まじまじとその腹部を眺めながらいったものであった。いま克二の視線の先でゆらめいているものは、彼の意識を混沌から救いあげるどころか、二度と再び、現実の時間に連れもどすまいとしている、なにか怪しい権力者の意志と力のようなものが働いているように、彼には思えるのである。

病床に就いて正確には十ヶ月になる。しかし克二の頭のなかでは、彼の歳月はもう遙かむかしの時の流れに忠実に従って、そこにすっかり溶け込みでもしたように、数字とは無関係の宇宙の層に刻みこまれている。

若年の糖尿病と診断されてから三十年間、彼は彼自身の人生につきあってきた。それは克二に

とってどうしてもそのような捉え方しかできない年月だった。彼の時間の流れは、その意志とはかかわりなく、肉体の病歴に逆らうことなく従順であった。そしていま、視力を奪われながらここにこうしてあらゆる幻影にとりまかれているのが自分自身なのだ、と克二は思う。それは絶えず騒音のように鳴りつづけている頭痛が、なにかの拍子でぴったりと消えたりするとき、音を吸いとられた脳の一部に冷水がひたひたと流れ込む感覚に似ている。克二はこんな静止した自身の脈拍を聞き取る思いで、これが自分なのだ、と思う。

能梨子はどこにいるのだ。もうすこし部屋の空気をなんとかしてほしい、能梨子、暗いんだよ、この暗さに気がつかないのか、おい、だれもいないのか。

克二は、眼の前の薄闇を払うように右手を動かした。そしてぼんやりと見える自分の右手を、なにか激しく躍動する自然の一部のように眺めた。それは枯れ落ちる寸前、風に顫えている木の葉のようでもあり、いまにも死滅するかのように、はたはたと羽を動かしている怪しい姿をした昆虫に似た生きものに見えた。

失明が始まって、どのぐらい経つだろう。克二は、病状の進行が、正確に時を刻むようにはっきりと現われるのを、これもごまかしようのない、生命力の証明なのだと思っていた。視力の減退が完了する頃には、たぶん脳内部に急激な異変が起るのだ——。克二は、未来を、適確に自分のものにするためには、病状の進行に遅れをとってはならない、という奇妙に倒錯した思いに捉われていた。しかしその思いは、ときおり彼に激しい厭世観を浴せかけた。からだに巣喰った疾

病に追いつめられまいとする意志と、その進行を先取りせずにはいられない焦躁感に彼は翻弄されていたといっていい。

病は予想を裏切ることなく、時計の針のように着実に進行し続けた。

「あなたが若年糖尿病に罹っているなんて、そんなことすこしも知らなかったわ、あなたはお義父様の立派な片腕だったし、もし正直にそのことをはなしてくださったとしても、とても本気にはできなかったでしょう」

病気に関して、能梨子がはじめて口にしたのは、克二に対する同情でもなければ、恨みごとでもなかった。

「どうして、一年近くものあいだわたしに隠しつづけることができたのか、そこのところがとっても気になるだけ……」

能梨子は、夫との性交が、病気の進行によっていつの間にか充分なものとは思えなくなった頃になって、ようやく知らされた彼の重大な問題を、夫婦間の愛情面にたちかえってこだわって見せた。

「わたしに内証にしていたということは、妻としての立場をあなたが、平気でないがしろにしていたことになるわね」

克二は、いかにも能梨子らしい、なにごとも理詰めで考えたがる癖を、そのときも気に入りの料理を眼の前に出されたような思いで、気楽に相手をつとめていたのだった。それは、能梨子が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

はじめての出産を無事に経験した直後のことで、母親になったばかりのみずみずしい果実のように成熟した妻の裸体を、白昼の密室で思いのままたのしむのと、ほとんど同じような性感を彼にあたえていた。

「病気を知らされていなかったということは、わたしがそれと知らずにあなたの命を削りとっていたということにもなるわよね」

「妻としてのいたわりなんか、あなたには不要のものだったのかしら」

糖尿病患者の食餌療法について、能梨子はまったく知識がないわけではないのだと、克二にいいたげであった。

もう二十年余りも昔のことだ。そんな会話を交わしたのは、能梨子が病身の克二をはじめて認めなければならなくなったあの頃の、ほんのちいさな一幕だったと彼は思う。

べつに隠していたわけじゃない。能梨子に求婚したときだって、その後の新婚時代、つまり爽子が生まれるまでの間、べつにひた隠しにしていたわけではない、あの頃からインスリンの注射が日課になった。能梨子はそれにもすぐに馴れて、注射器の扱いかたもうまくなった。インスリンの注射には、目盛りが細かく刻まれている普通のより細長いものを用いる。初期の頃、克二は事務所の医務室へ時間を決めて持参した。しかし能梨子の手でそれができるようになってから、克二の糖尿病との毎日は、家族ぐるみのしごく安定したものになった。

細身の注射器は、素人には容易に扱い馴れないもので、腕や太腿に、とても自分の手で打てる

ものではなかった。

インスリンの注射を打つことと、食事に気をつかうことと、あとは適度な運動に馴れ親しむ規則正しい生活を自分のものにすれば、病気と共存というかたちで、無事な生きかたが約束されていた。

克二はどうしても自身の手で打つことに積極的になれない注射を、能梨子が苦もなく扱うようになってから、これで自分の生活は、能梨子のものになったのだと思った。それはどこかいい知れぬ、甘美な性感を内部につきとめたような思いであった。これで能梨子の生命と切っても切れぬ結合が行われたと思った。

能梨子は、まるで有能な看護婦のように、手ぎわよく注射器を扱いながら、その実、若い女らしく不安を隠しきれないようすで、克二の胸にしがみついたりした。

「一生、死んでしまうまで、毎日毎日こうして注射を打ちつづけるなんて、あなた、ほんとうに大変なことね、かたときも人工呼吸をやめられないひとを相手にしてるようなものだわ、毎朝、こうしてあなたのからだに針をさしながら、このひとは人間かしらって思うの、ほんとうよ、正直なところときどきあなたが人間以外の不思議な生きものに思えるのよ、だってそうでしょう、わたしが注射をしない日なんて考えられないんですもの、わたしはあなたの注射器で、あなたはわたしの生きている証拠を、こうして突きつけているわけなの……こんなに、まるで麻薬患者みたいに、これがないとあなたは一日も元気でいられないの、ねえ、そうでしょう、腕も腿もお尻

も、こりこりになってしまって」

いまに針を刺すためのあなたのからだがなくなってしまう、能梨子はそんなことをいうと、自身を愛しむように、いつまでも克二の胸に顔を埋めていた。

「あなたが病気のことをわたしに隠してまでも結婚したいと思ったのは、きっとわたしのことを、病気の次に大事な人間だと思ったからなのね」

能梨子の軽やかに喋ることばは、克二の耳に快くひびくかわりに、かならず彼をちいさな戸惑いに誘いこんだ。それは能梨子独特のことばの遊びともいえる、いかにも罪のない表現上の面白さのせいであった。

「だって、あなたは、病気を愛してはいないけど、とっても仲良くしてるじゃないの、わたしとも同じように仲良くやって行けそうだと思ったのでしょう、いいのよ、あなたにとって病気と能梨子は同じくらいの値打ちがあるのよ、それに両方とも充分バランスがとれているわ、あなたは両方をそれはそれは上手に手懐けたわ」

能梨子は、朝八時に注射器を消毒用のアルコールの容器から取り出すと、念入りにアルコールを払って、インスリンの薬罎のゴムキャップをアルコール綿でゆっくり拭う。それがすむと、注射器の目盛りに眼を据えて、新しい針をつける。注射器の空気をすっかり罎に押し出し、針を薬罎に垂直に突き刺してから罎を逆さまにしてインスリンが注射器に流れこむのをずっと見守る。そして針が抜けないように注意しながら、注射器を静かに抜き取る。

能梨子がほっと息をつくのを前にして、克二は、なにか大事業にとりかかろうと、一点に視線を据えている生真面目な彼女が、彼自身の良き相棒として、どこまでも強い信頼感を見せようとしているのだと、なんとも怪しいいうにいわれぬ満足感をおぼえるのである。それは強い信頼感を相手に求めなければならないのは、能梨子よりむしろ彼自身であるはずなのに、ことさらに彼女をしっかりと受けとめてやりたいと思うのは、どうあっても能梨子には見抜かれたくないというしろめたい気持でもあった。それは医者の手からおまえの手におれの命を託してやったのだ、という、彼自身の矮小さを認めないわけにはいかない夫としての優越感としかいえないものであった。

そして、すっかり用意された注射器の針を、指にはさんで、第二段階にとりかかるためにほとんど表情を殺した能梨子が、じんわりと自分にいどみかかるのを、克二は更に一層の満足感をもって迎えるのだった。

こうして毎朝の儀式が滞りなく夫婦のあいだで交わされて何年経つだろう。克二は歳月の流れのなかに、能梨子の生活を考えるとき、かならずといっていいほどわずかに自虐的な感情に突きあたった。それは病める彼を、たとえようもなく甘美な音楽で包みこんだ。

能梨子は生きたからだに針を突き刺しながら、女になった。彼女はおれを手中におさめて好きなように、心ゆくまで針を刺しつづけた。その年月、おれはあれのために怯えた振りをしなければならなかった。能梨子は女になり母性を獲得し、そして病夫を抱えた理知のある人間になった。

能梨子の内面はおそらくおれと同じほどに老成しているだろう、彼女は見かけよりははるかに、薄穢く齢老いた女になったはずだ。あれが、ここまで来るのに穢れずにいられたはずがない——。

克二は、能梨子が彼の持病をはじめて知ったときの、無邪気な顔を忘れられなかった。

「わたしに隠してまでも結婚したかったのね」

「わたしに本当のことをいったら逃げられると思ったのね、おばかさん、そんなことがこわかったなんて」

能梨子は看護婦役を、舞台上の役柄のようによく熟(こな)した。長期に亘って実に堂どうと。そしていよいよ最後の幕切れを前にして能梨子はいま、用意万端整えている。そうだ、舞台上の役者が生と死をとり違えんばかりに魂を一点に集中するように。

「ほんとうにそうなの、健康なあのひとをまるで知らないのよ、はじめの一年ぐらいわたしが知らなかったあいだだけ、あのひとは健康そのものの顔をしていたわ。でもそのうちあのひとのスマートさは病気のせいだとわかったの、お義父様があんなに肥満体でいらっしゃるのに、克二ったら鶴みたいに痩身でしょう、あの頃は本当に痩せてたのね、最近すこしふっくらしてきたけど。いいえ浮腫んでるなんて、あなた、そういうことは心配していないわ」

克二が出所しなくなってから数年になる。それまでは、インスリンと食餌療法でなんとか人並

みに通勤できた。医師の指示で在宅勤務というかたちに落着いたのも、法律事務所の経営者である蒼野善吉の息子への配慮故で、長年父親のもとから独立することばかり考えていた彼も、すでにこれ以上の恩恵にはとうてい恵まれないだろうというところまできている。ものいわぬ動物のように自分はこうして横たわったまま、父親か妻に廃人同様の生命をまかせきりにしてきたのだ、と思う。しかしそれももう間もなく消え果てるときが来るはずだ。

能梨子が、誰かれなしに夫の病状を語るときの、表情の揺れ動く手振りや口調を、克二は、もう長年聴きなれたひとつのメロディーのように耳にするのである。能梨子のよく透る声は、克二の耳にまるで純心無垢な幼子の唄に聞こえる。

「ええ、だんだん眼が見えなくなっています、でも気力だけは充分あります、昨日も義父の庭の趣味をいつものようにさんざんけなしたあげくなんていったと思います、学生時代庭師を手伝って、特別注文の青石とかなんとか、大きな石を運ばされたときにぼくは発病したんだって、石には神霊が宿っていて、むやみやたらに動かしてはいけないのに、欲望のおもむくままに、やたらに石を買ったり飾ったり、動かしたり、そういうことを好んでする人間は、ただではすまされないって……おかしいでしょう、最近変なことばっかりいうんですよ、ぼくの墓は居間から見える場所にしてほしいとか……。ええ、わたしははいはいっていってます、克二の願いはなんでもかなえてやりたいと思いますし、あのひとは、自分の病気をとっても大事にしてますでしょう、そんなところを毎日見てますと、やっぱりこのひとは純粋なひとだなあって思いますのよ、つくづ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.